

読書

歴史が始まってから、人類は「生命」をどうとらえてきたのか。古今東西の哲学や宗教から最先端の分子生物学に至る過程を見据え、新しい生命原理主義を構築しようとする画期的な大著が話題を呼んでいる。総ページ数は九百十四あり、四百字詰め原稿用紙にして約二千八百枚に及ぶ。理系の専門書に見えるが、文学研究を軸としながら、歴史学や生物学、哲学など多彩な分野から、日本の生命観に迫っている。「生命」を考える上で百科事典のような書物だ。執筆した鈴木貞美さんは「遺伝子やクローン、地球温暖化などの

本を語る

問題が登場し、「生命」を取り巻く状況が様変わりしている。今、新しいものとして論じられている生命の問題が、実は昔からあったのではないか。そんな疑問が根底にあった」と振り返る。膨大な文献をたどっていくと、バイオエシックス(生命倫理)に似たような議論は、二十世紀初頭にも存在した。日本では欧米の思想の影響を受けながら、「生命」を世界の至高の原理とする「生命主義」が大正期に現れていた。「欧米流の自然征服観や生存競争の思想を超えようとする思潮が、早くに登場していたのだ」と指摘する。

多彩な分野からアプローチ

例えば、岡倉天心は東洋的な「氣」を「生命」の宇宙に置き換えた。彼の考えは大正生命主義の中核になっていき、その後、「宇宙大生命」の観念をまとう日本の神道思想が登場する。不幸にも大正生命主義は、狂信的なイデオロギーの支柱にされてしまった。

戦後、日本は経済成長の道を突き進む。「自然を愛する国」なのに、水俣病が生まれ、公害先進国となった。「人間中心主義」だけでは、人類の生存が危うくなることを生態系の考え方や分子生物学は明らかにしていた。一九八〇年代に入ると、環境破壊や異常気象などで、その限界は一層鮮明になった。ただし、人間が自然の一部である考え

「生命観の探究」の鈴木貞美さん



大著を刊行した鈴木さん(京都市西京区、国際日本文化研究センター)

すぎ、さだみ 1947年生まれ、国際日本文化研究センター教授。著書に「日本の文化ナショナリズム」など多数。

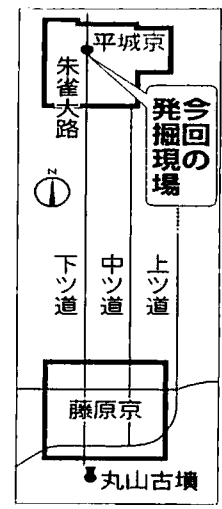
方だけでは十分だという。同時に自然はもろいからだ。「この本はライフワーク。しかし、大きく広げた風呂敷をようやく結んだ感じ。総論を仕上げたにすぎず、各論ではたくさん仕事が残る」(「生命観の探究」は作品社刊、七九八〇円)

7世紀初に大凡 古朝で整備か

れ、7世紀初めに大凡
った蘇我馬子が指揮した
のではないかと話す。
また、千田稔・国際日
本文化研究センター教授
(歴史地理学)は「隋か
らの使者に対し、盆地全
体を都城に見せかけよう
としたのではないか。推
古朝の見直しを迫る大発
見」と評価する。

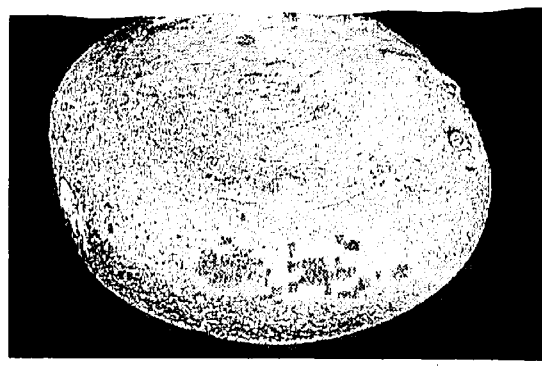
一方、和田幸・京都教
育大名義教授(日本古代
史)は「直線道路の整備
は統一的な国家権力がな
ければ不可能。大化の改
新(645年)後ではな
いか。推古朝と断定する
には尚早」と指摘。猪熊
兼勝・京都橋大教授(考
古学)は「天文学が伝わ
った推古10(602)年
以降なら技術的には可能
だが、なぜ7世紀初めに

榎考研が今年7月、国
道308号の拡幅工事に
伴い、計約140平方メートルを調査。東の側溝跡の底に密着した状態で須恵器の杯蓋(直径13センチ)が出た。周辺に7世紀初



7世紀初 須恵器を出土

飛鳥と平城京を結んだ古代の幹線
「下ッ道」の側溝跡が、奈良市
「奈大路で見つかった。1日発表し
奈良県立橿原考古学研究所による
出土した須恵器から7世紀初め
造られたとみられる。下ッ道は7
世紀中ごろの斉明朝に飛鳥から北に
かって整備されたとする説が有力
だったが、それより30〜40年前の推
朝に、直線の計画道路が奈良盆地
体を南北に貫いていた可能性が高
なった。【林由紀子、写真も】



少道東側溝から見つかった須恵器
杯蓋

盆地中央を南北に貫く古代の幹線
「丸山古墳(奈良県橿原市)」から
北の北端まで23キロに及び、一部は
奈大路となった。道路幅(東西の
は23・4メートル。中ッ道、上ッ道とは
異なり並ぶ。

一冊啓上

奈良県在住の歴史地理学
者が大和路を訪ね、歴史の
謎に思いを巡らした。飛鳥、
藤原京など宮都のほか、卑
弥呼埋葬説がある箸墓古墳
などを取り上げているが、と
りわけ興味深いのが平城京
についての記述だ。

昨夏、平城京の規模は定
大和路を訪ねて
歴史の真相探る

説の南北九条ではなく、十
条であったとする発掘調査
結果が出た。著者は、藤原
氏が権力をにぎった時期に、
平城京の存在感を外国の使
節に誇示するために未整備
だった十条を切り捨てて立
派な都に見せたと推論する。
歴史の真相に鋭く迫ろうと
した意欲的な本だ。
(東方出版、2000円=税抜き)

「古代の風景へ」(千田稔著)

0784日経夕